

# 30Q-pm30

薬学生のコミュニケーション能力における学年および男女差に関する多変量解析手法を用いた検討

○倉田 香織<sup>1</sup>, 土橋 朗<sup>1</sup>(<sup>1</sup>東京薬大薬)

【目的】コミュニケーション能力は薬剤師業務の実践において必要な能力と位置づけられている。薬剤師のコミュニケーション能力測定尺度として開発されたTePSS-31と互換性のある薬学生評価版を作成し、コミュニケーション能力育成のための教育における重点を明らかにすることを目的とする。

【方法】2011年度1年次生208名および3年次生150名を対象に設問文のうち「患者」を「友人」におきかえたTePSS-31改良版をマークシートを使って実施した。各設問に対する得点を男女および学年で比較するとともに、IBM SPSS Statistics 19による因子分析を実施した。

【結果】1年生では4因子28項目が抽出され、その累積分散率は47%であった。第1因子「人間観察」、第2因子「積極的接近」、第3因子「感情処理」、第4因子「共通認識」と命名した。薬剤師に比べ、得点が著しく低い設問は、初対面の人ともすぐに会話がはじめられるや、一度にたくさんの質問をしないを含む傾聴に関するものであった。得点はいずれの因子においても女子の方が高かった。男女差は第4因子が最大であった。第2因子では話しやすい環境づくりが男子に比べ非常に高かった。第1因子に属する嫌なことを伝えるや問題を発見するについては低かった。

【考察】TEPSS-31と比較すると第1因子と第4因子は項目の入れ替えが見られた。初対面での会話や傾聴などは薬剤師の必須能力であるとともに、入学前の学生生活で意識することの少ない専門性の高い能力であるといえる。他者の意見を尊重すること、問題を発見し、解決のための働きかけを行なうことにおいて薬剤師が必要とする能力を薬学教育の中で重点的に育んで行く必要性が示唆された。